

これは報われぬ恋だ。

3

This is Unrequited



クラッシュ

マック行きつけの雑貨屋の店主。
ハーフエルフの美人さん。
基本的に優しいが、怒らせると大変怖い。



ヴィール

ヴィデオさんによく似た男性。
ひよんなことから
健吾と再会し——？



レガロ

『呪術屋』の店員。
時折マックの心を読むような
発言をする。

ADO (アナザーディメンションオンライン)

圧倒的な没入感と世界観を誇る、VRMMORPG。
十年前に勇者が魔王を倒し、平和になった世界を舞台に
プレイヤーたちは職業を決めてゲームをプレイすることになる。
多人数でパーティーを組むことも可能。
バトル、生産など自分のやりたいことをやることができ、
ゲーム内のNPCとも多彩な交流ができるのが特徴。



ヴィデオ

トレの街の門番兼、
マックの専属護衛。
今回、予期せぬところで
血縁者の存在が
判明するが……？

「もし俺がマックと同じ魂を持っていたら……
ずっと、離れることなく、同じ時を
同じ場所で行えるのかも、な……」

「ただ、願うなら。
一緒に幸せになるのならヴィデオさんと
幸せになるのがいいってただそれだけ。」

マック (郷野健吾)

お人好しな薬師であり、錬金術師。
ゲーム世界の存在である
ヴィデオさんとの恋に悩みつつも、
愛を貫く。

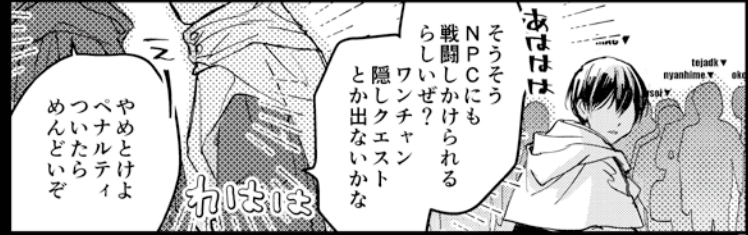
CHARACTERS

LOVE

目次

これは報われない恋だ。	3	
3 番外編		471
		7

「勇者の手によって平和になったこの世界で、あなたも自由に生活してみませんか？」



軍命の人よ

NPCでした

これは報われない恋だ。 3

プロローグ

『アナザーディメンションオンライン』、通称A D O。

今一番人気のVRMMOゲームだ。

俺、郷野健吾も、学業そっちのけでこのゲームを楽しんでいる。

けれど、最近は楽しいだけじゃ済まないことがたくさんあるんだ。

A D Oの中で、俺はノンプレイヤーキャラクター、いわゆるNPCと恋人になった。

その門番さん、ヴィデロさんは、とても素晴らしい筋肉を持つイケメンだ。

俺が拠点としている初めの街から三番目の街、トレの街の門番をしている。

いつでも門を行き交う街人や俺達みたいなプレイヤーに爽やかな挨拶をしてくれるし、情報を交換してくれたり、森の状況を教えてくれたりする。

強くてかつこよくて声も良くて、そして性格も良い。悪いところなんてどこにもないんじゃないかな。ろうかという素晴らしい人。好き。

そんなヴィデロさんは出張命令のせいで、しばらくトレの街からセイ城下街というところに行ってしまった。トレの街の雑貨屋店主クラッシュの護衛を終えてようやくセツテの街から帰ってきた

俺は彼と完璧にすれ違ってしまった、ログインしてもヴィデロさんに会えない状況になった。

——それが思った以上に辛かった。

そんな時、俺は現実の世界で、ヴィデロさんにそっくりの外国人さん——ヴィルさんと知り合いになった。

もしかして、ヴィデロさんの中の人……？　と思うくらいに似ていたけれど、話してみると全然違う。

似ているけど違う、そんな人に出会ったことで余計にヴィデロさんに会えない辛さが増した。

だから俺は、親友の高橋雄太に途中まで手伝ってもらって、ヴィデロさんがいるセイ城下街まで向かうことにした。

途中にある砂漠都市までは雄太の馬に乗せてもらって爆走。砂漠都市で雄太達と別れてからは乗合馬車に乗って。

護衛の人と仲良くなったり、途中立ち往生していた馬車を助けたりしながらなんとかセイの街にたどり着き、いざヴィデロさんのもとに行こうとしたら、今度は俺がトラブルに巻き込まれてしまった。

セイ城下街に来る途中に助けた馬車が、実は貴族の馬車だったことがその発端。

俺がよかれと思って渡したハイポーション。その効果の高さに目を付けた貴族に、追い回されてしまったのだ。

そして肝心のヴィデロさんは、セイ城下街の外の門じゃなくて、貴族街と呼ばれるところと市民

街を隔てる門に立っていた。

違う鎧を着ていたヴィデロさんは、やっぱりここでも格好良くて。

その貴族を知っていたヴィデロさんは、連れていかれそうになっていた俺を助けてくれた。

俺はせっかくヴィデロさんが逃がしてくれたからと、さっさと逃げることにした。

クエストを受けていたこともあり農園に向かうと、農園主のモントさんと仲良くなった。

そして、俺はヴィデロさんの能力や家族のことを知ることになったのだ。

どうしてヴィデロさんがセイ城下街に呼ばれたのかも。

ヴィデロさんは、この世界の住人達にはなじみのない、『スキル』というものを持っているそうだ。

スキルとは、俺達、ADOのプレイヤーは当たり前前に持っているもの。

俺だって料理スキルや調薬スキル、索敵鑑定その他……たくさんのスキルを持っている。けれど、このゲーム内の住人がスキルを持っているという話は誰からも聞いたことがなかった。そもそもスキルという概念がないのかなって思っていた。

それなのに、ヴィデロさんはお母さん譲りの『幸運』というスキルを持っているそうだ。その言葉に、一瞬夢を見た。

——ヴィデロさんは、本当に、俺達の世界に存在してるんじゃないのかって。

俺はめっちゃくちゃヴィデロさんのことを好きだし、ヴィデロさんだって俺のことを愛してるって言うってくれる。ログインすればヴィデロさんはちゃんと存在していて、くっつけばちゃんと体温が

あって、鼓動も呼吸も、そして、性欲もあるんだ。

けれど、ログアウトすればヴィデロさんは、ゲームの中のデータだけの存在だ。

いつもそのことに、胸が締め付けられるようだった。

だから、俺は、プレイヤーしか持っていないはずのスキルを持つヴィデロさんもしかして……と思ってしまった。

結局、ちよつと悶々としながら、俺は迎えに来てくれたヴィデロさんと一緒に宿屋に泊まった。次の日なぜかその街でクラッシュとばったり会った。そして、会う約束をして別れた瞬間、またしても俺は例の貴族にクラッシュの目の前で誘拐されてしまった。

するとクラッシュは、その時門番をしていたヴィデロさんも巻き込んで、馬車対馬の大捕り物劇をセイの貴族街で繰り広げた。そこで小さいころに誘拐されたことがフラッシュバックし、クラッシュの魔力が暴走しそうになってしまったのだ。

それはなんとか未然に防げたけれど、ちよつどそこにエミリさんとセイジさんが現れた。

エミリさんは、クラッシュの母親でギルドマスターでもあるエルフ。

セイジさんは、たまにふらつとクラッシュの店に現れるお兄さん……だと思っていたら、実は最前線にいるプレイヤーをシークレットダンジョンというところに連れて行くってくれるという噂の『ダンジョン探索者』。

その二人の登場でさらに場が混乱しつつも、結局、俺は貴族に捕まることなく、薬師の力を搾取されることもなく、無事トレに戻ってきた。

そして今日、とうとう城下街の門番の仕事がお役御免となったヴィデロさんがクラッシュに連れられて帰ってきた。

そわそわと二人の帰りを待っていると、目の前に現れたのは、待ち焦がれたヴィデロさんと、クラッシュと、そして、白馬……？

ようやく再会することが出来た俺は、クラッシュの店からヴィデロさんをお持ち帰りしたのだ。た——

一、現実か虚構か^{パレチャル}

工房の中で抱きしめ合ったまま、俺達はキスをした。

いつものように『細胞活性化剤 小』を飲んで少しだけ大人になつてから、ヴィデロさんの手を引く。

無事剥がれたパンツを足元に落とし、俺とヴィデロさんはベッドの上に移動した。

「マックの料理、美味しかった」

「うん」

「待っててもらえて、嬉しかった」

「うん」

「会いたかった」

「うん、俺も」

「こうして、マックを抱きしめたかった」

「俺も、すぐくヴィデロさんを抱きしめたかった」

軽いキスを繰り返しながら、ヴィデロさんが俺のことを確かめるように言葉を紡いでいく。

そして、スン、と息を吸って、うっとり目を瞑った。

「マック、なにかいい匂いがする」

それは俺がよりこのベッドが、じゃないのかな。

数日前に作った香石^{しゅうせき}の残りがちょうど枕元に置いてあったので、そっと手を伸ばして瓶の蓋を開ける。

それからヴィデロさんに差し出した。

「この香りじゃない？ 俺もこの香り凄く好き。ヴィデロさんが気に入ったんなら、ひとつ貰って使ってほしい」

「貴重な物じゃないのか？ 俺は自分で使うより、マックが纏^{まと}ったこの香りをこうやって堪能したい」

ヴィデロさんがそう言いながら俺の首元に顔を埋める。

その遠回りで遠慮がちな言葉に、俺はちよつとだけ目を細めた。

違うんだよ、俺が、ヴィデロさんに使ってほしいんだ。そしてこの香りでリラックスして、身体

と心を休めてほしいんだ。

だから、ヴィデロさんの背中に手を回してぎゅっと力を入れる。

「ううん、貰ってほしい。ヴィデロさんもこの香りでいてくれたら、違うところにいるても、同じ香りを纏っているんだって思うとき、なんか——」

すごく、照れくさいけれど嬉しい。

熱い頬を隠すように俯いて呟くと、そっと顔を持ち上げられた。ヴィデロさんはとても綺麗な笑みを浮かべている。

「ああ……それは素敵だな。でも、この香りを纏った瞬間、マックのこういう魅惑的な姿ばかり想像してしまっって、仕事にならないかもしれない」

「え……」

そ、それを言われたら、俺もそんな想像ばかりしちゃうから。

どうしよう、リラックス用のはずなのに……

「俺、普段はパンツ張り付いているのに……そんなこと言われたら、毎日生殺しになっちゃうじゃん……！」

「でも、何も纏わない姿で俺の腕の中で身体を預けて、こう、足を淫らに開くマックの姿が……この香を嗅いだ瞬間、脳裏に——」

「ま、まだ足開いてないから」

「でもすぐ開くだろ……こうやって」

ヴィデロさんの手のひらが、俺の太ももを下から上に撫で上げていく。

「あ……っ」

「ほら、開いた。それに、もうこんなになって」

太ももから付け根、そのまますでに元気になってる俺の息子まで、ススス、とヴィデロさんが撫で上げる。

途端、ピクン、と意図せず身体が跳ねた。

「待って、なんかすぐ」

「イきそう？ 一回イっておくか？」

「やだ、まだイきたくない」

俺の手から落ちた香石が枕元にコロロン、と転がると、ふわっといい香りが俺の鼻孔をくすぐった。それと連動するように、ヴィデロさんの手が、敏感なところを撫で上げていく。

「ああ……っ」

握られたわけじゃなくて、ただ、手のひらでさらっと撫でられただけなのに、腰が揺れるくらいの快感がジンと身体の奥から湧き上がってくる。

なんか、ヴィデロさんに触られているって思うだけで、それだけで満たされる。

一人でいた時は、なかなかイけなくてちよっと大変だったのに。

なんでこんなに、と視線を上げると、まっすぐ俺を見つめる目と視線がぶつかった。

ちゅ、と落とされるキスに、思考が霧散する。

そんな優しく触らないで。もつとすぐにでも奥の奥で愛し合いたい。

そんな欲望ばかりが胸の中を満たしていく。

「ヴィデロさん……」

されるがままなのに耐えられなくなつて、俺はずつと枕元に常備されているホットゼリーを手に取った。

蓋を開けて、それを手に零す。

クチュ……と音を立てながら、その手を自分の後ろに持つていく。

「早く、ここで」

ヴィデロさんを受け入れる場所の周りに、ゼリーを塗り付けていく。

ヴィデロさんの喉が鳴った。

上下する喉仏が好き。だって、俺を見て欲情してくれてるってことだから。

「ヴィデロさんを」

指をそつと孔に添えて、入り口をぬるぬると撫でる。自分で指を挿れるのはちよつとまだ抵抗あるけど、でも……

自分が触れた場所がヒクつと動いたのが、指から伝わってきた。

俺は、俺の息子に添えられていたヴィデロさんの手を取り、自分の指が添えられている場所まで導く。ヴィデロさんの緑の目がさらに熱を帯びた。

「マック、誘い方が上手くなつてきてる……手加減出来なくなりそうだ……」

「手加減、しないで……」

囁くようにそう返した瞬間、ヴィデロさんの指が俺の手のゼリーをさらつて、中に挿入^{はい}ってくる。

「あ、あ、うん……」

指一本分の違和感が、快感にすぐに変わっていく。でも、そんなんじや全然足りなくて。

ヴィデロさんの指に寄り添うように、俺は自分の指も、挿入していた。

いやらしい水音と、香石のいい香り、そして、ヴィデロさんのキス。指の感触と、手を握られる幸せ。

それらが一気に押し寄せてくると、もう耐えられなくて、俺は一度目の精を飛ばしていた。

俺の唇を啄^{くは}んでいたヴィデロさんは、そこから首、鎖骨、肩、胸、色んな所にキスを落としていく。

挿入された指が時折クイツと曲げられて、ちよつと気持ちいい所を刺激して、俺の身体を跳ねさせる。

小さな乳首を啄まれ、吐息が洩れる。

普段だったら触れられてもくすぐったいだけのわき腹も、ヴィデロさんを相手している時だけは性感帯になる。

そして、オプシオン傷にヴィデロさんの唇が触れて……

「……つう、ああっ！ん、ふ……っ」

脳天を突き抜けるような快感には何回体験しても慣れない。変色している皮膚をヴィデロさんの

唇が這うたび、俺の口から声にならないほどの嬌声が洩れる。

だめ……気持ちよすぎて、変になる。

ヴィデロさんに握りこまれながら一緒になつて解していた自分の指を、半ば強引に引き抜いて、尻たぶを鷲掴む。

左右に開いて、真っ白になりそうな頭で、ヴィデロさんに懇願した。

「もう、だめ、ここにヴィデロさんを挿れて、イきたい……っ！」

一回出しても全然萎えない俺の息子が、今もダラダラと体液を零している。濡れているのはゼリーのせいなのか俺のその零したモノのせいなのか、すでにわからない。

俺はっぴかりこんな気持ちよくていいのかな。俺はまだヴィデロさんのヴィデロさんに触れてすらないのに。

「ヴィデロさんに、気持ちよくなってほし……」

呟いた瞬間、ヴィデロさんが俺の傷に軽く歯を立てた。身体がビクン、と跳ねる。

目の前が白くなった。一瞬息が詰まって、身体が痙攣する。

その後、詰めていた息を吐きだしてこわばった身体の力が抜けた瞬間、トロトロになったところに熱が触れた。

期待で心臓が大きく一つ高鳴った。

「あ、……っ、……ん」

熱が俺の中を進んでくる。

あまりの気持ちよさに、声が出なかった。

もつとヴィデロさんを感じたくて、腕を伸ばして、ヴィデロさんの身体を引き寄せる。その動きでまた、快感を拾う。

「マック気持ちよさそう……」

「イイ……いっ」

間近で笑うヴィデロさんに、うわ言のように繰り返す。

腕を引いて身体をくっつけると、ヴィデロさんも俺の頭を胸に抱きこむようにして挿入してくる。この、ぴったりくっついた距離感がすごく、好き。

身体の中にある熱も、触れた肌も、息遣いとか全部好き。

「ヴィデロさ……好き」

熱が最奥を突き上げ、引いていく。ゆっくりな動きに、俺の吐息が重なる。

「俺も、愛してる……」

いつも口にしてくれる愛の言葉が、すごく尊い。嬉しくて思わず目の前であったヴィデロさんの耳たぶを食むと、俺の中のヴィデロさんがさらに成長した気がした。

こういう時に零れるヴィデロさんの吐息がすごくエロくて好き。ついついさらにハムハムしていると、「こら、マック……っ」とちよつとだけ焦ったヴィデロさんの声が聞こえて、思わず笑った。好き。

「そういうことすると、保たないだろ」

「……そっか、ふふ……っ、ヴィデロさんってくすぐったがりだもんね……」

そんなところも好きだけど。

俺が笑うと、噛みつくようにヴィデロさんにキスされた。

舌を絡められ、吸われて、甘噛みされて、舌が離れていく。

ヴィデロさんが身体を起こす。

離れた肌が少しだけ寂しいな、と思っていると、膝の裏を掬うようにヴィデロさんの腕が潜り込んできた。

俺の足を抱えて、ヴィデロさんが激しく動き始める。

「あ、ああ！ つは、あんっ」

今までのゆっくりから一転、すごく激しい動きに、すぐに俺は音を上げた。

奥を突かれるたびに嬌声が洩れて、中のヴィデロさんをぎゅうつと締め付ける。

締められても強引に引き抜いてまた強引に中を進んでくるヴィデロさんに、またも嬌声を上げる。すぐく気持ちよかった。

深くまで挿入されるたびに頭が真っ白になる。

下腹部が熱くなって、引つ切りなしに熱が襲ってくる。

「ん、ん、も、あつ……っああ、あ、あ！」

「……っ、ふ……っ」

ヴィデロさんの口からも甘い吐息が零れて、それに煽られるように、さらに俺の中で欲望とか快感とか好意とか愛情とか色んなものが混ざっていく。

そして、最後には絶対に「好き」に行きつく。

「や、好き、大好き……っ、あ、ん、ヴィデロ、さ……っ！」

うわ言のように零した言葉に、ヴィデロさんのヴィデロさんがいつそう深くまで挿り込んできた。とぶ、墮ちる、もうダメ……

頭の中が爆発しそうになりながら、俺は盛大に腹の上に白い体液を飛ばし、ヴィデロさんを迎え入れているところを痙攣させた。

ヴィデロさんも、その痙攣に眉を蹙めると、小さく呻いて俺の中に熱を吐き出していた。

抜けていくヴィデロさんの熱が名残惜しい。

そう思いながら、怠くなった身体の力を抜いて、ヴィデロさんを見上げた。

肩で息をしながら、視界に入るヴィデロさんの事後の顔を、マジマジと見てしまう。

ああ、エロい。少しだけ上気した頬に、俺を愛しげに見下ろす、濡れたような瞳。

そして、吐き出される吐息と、頬を伝う汗――

うっとりとその顔を堪能していると、そのエロかつこい顔が近付いてきた。

そして、半開きになっているであろう俺の情けない口に、その弧を描いた唇を重ねる。

「マツクの顔が、すごくやらしい」

「それは、俺の、セリフ」

息切れしているから、言葉が途切れ途切れになる。

ちゅ、ちゅ、と繰り返す軽いキスを仕掛けてくるヴィデロさんは、俺の頬を撫でて、髪を梳いて、首筋を指で辿った。

まだ誘われているみたいな戯れに、思わず笑ってしまった。好き。

それから身を清めて時計を見ると、一気に盛り上がったせいか、まだ二人でイチャイチャする時間が少しはあった。

もう一ラウンド、とはいかないけれど、服の上からだって胸筋は堪能出来る。

俺はここぞとばかりにヴィデロさんの胸に顔を埋めていた。

はあ、幸せ。俺、この筋肉大好き。

大半の男子が憧れる胸の谷間より、このきゅつと引き締まってちよつと硬めのヴィデロさんの胸に顔を埋めていた。

顔をぐりぐりしたいけど、それをすると怒られるのは目に見えているので、おとなしくただ顔を埋めている。そんな俺の髪を、ヴィデロさんが優しく指で弄んでい

こんな風に言葉もなくべったりくっつくのはいったいいつ以来だろう。

しかも俺の工房だから、心身ともにリラックス出来る。

「……幸せ」

思わず零すと、ヴィデロさんがくすつと笑って、その胸筋を上下させた。

「マックにそう言ってもらえると、俺も幸せな気分になるな。無理を言っさつと帰ってきてよかった」

「え、無理を言ったんだ……」

ヴィデロさんの言葉に驚いて、堪能していた胸筋から顔を上げると、ヴィデロさんはニヤツと笑う。俺を揶揄う時の顔だ。

「あの後、宰相殿にいつになったらトレに戻るのか訊いたんだ。ここにいてもまた同じようなことが絶対に起きないとは言えない。それを俺の『幸運』のせいにされたらたまじゃな

いから、トレに帰したほうがこの街にとっては幸せだって言っ

目を瞬かせて、俺は苦笑した。

ヴィデロさんのスキルである『幸運』は、ヴィデロさんではない人が悪意を持って利用しようとすると幸運ではなく、不幸を招く。宰相はヴィデロさんのスキルを知っているから、もしヴィデロさんを街にわざと留めようとしたら何が起るか分からない——という話だ。

そういう抜かりないヴィデロさんも好き。

「そうだね。スキルを他の人が使おうとするなんて、普通に考えると出来るわけないし。本人の気持ちがないがしろにするとか本当に失礼だね。貴族達は何考えてるんだろ」

もちろん、ゲーム内だったら俺のスキルを使うことが出来るのは俺だけだし、俺のためにスキルを使ってくれて頼まれても、嫌な奴には使いたくない。俺を利用して自分のいいようにしてやる

う、なんて考えてる奴なんかには絶対にスキルを使いたくない。薬師然り、錬金術師然りだ。ヴィデロさんの『幸運』スキルだつて、ゲーム内のパッシブスキルだつて考えると、俺達プレイヤーにとつては、使つてやろう、なんて考えにはならないよ。

「『幸運』スキル？ 幸運値^{ラック}が上がるのか？ いいなあそれ。どうやつて手に入れたんだよ」なんて、そんな程度の話なのに。

スキルが目に見えない人達にとつては、全く違う感覚なのかな。

そんなことを考えていると、ヴィデロさんにいきなり抱きしめられた。

「そういうことが簡単に言えるなんて、やつぱりマックはすごいな……」

「たぶん、俺じゃなくてもそう考える人は少なくないと思うよ」

ギョツと抱きしめられて顔が見えないよヴィデロさん。

俺の髪の毛に顔を埋めてぐりぐりするヴィデロさんにそう言うと、ヴィデロさんはさらにぐりぐりしてきた。

「少なくとも、俺の周りにいた人は、俺を怒らせると自分の身に不幸が訪れると信じていた。だからみんな俺とは距離を置いていたんだ。母親が消え、その後すぐ父親も亡くなって、身分というものを王に返上してトレの門番になって……そこでようやく俺は俺と距離を置かない人達と共に過せるようになったんだ」

「ヴィデロさん……」

そっか、ヴィデロさん、お父さんも亡くしているんだ。だから、家族はいないつて。身分を返上

したつてことは、お父さんは身分のあった人で、そのつながりから門番になったつて感じなのかな。後ろ盾が必要だつて言っていたし。亡くなったお父さんが、後ろ盾になっていたのかな。

俺がヴィデロさんの背中に手を回すと、またヴィデロさんが続けた。

「トレの街の門番は、皆、『幸運』なんて気にもしないような奴らばかりだった。だから、一緒に馬鹿な話をして、一緒に飲んだくれて、本当に楽しいと思つたんだ。好きな人も出来て、周りも一緒になってやきもきしながら応援してくれた。でもそれが叶つた途端、セイの街行きだろ」

俺の髪に顔を埋めたまま、ヴィデロさんが静かに言葉を紡ぐ。

「確かに、トレの門番さんは皆おおかだもんね。話してて、一番楽しい門番さん達だよ」

「だからつて他の人に目移りしないでくれよ」

ちよつとだけ拗ねた声でそう言うヴィデロさんに、思わず笑つてしまふ。

目移りなんてするわけがない。俺の脳内がどれだけヴィデロさんで一杯か、見せてあげたいよ。「セイの街の貴族街で、あの街の門番達と生活して、今までの生活がいかに恵まれていたのかわかった。あつちでは、昔のままだった。俺を怒らせてはならないという緊張した空気と、『幸運』だからこそその貴族街への栄転だというちよつとした嫉妬の視線とかな」

「栄転、だつたのかなあ。俺には貴族達のがままに巻き込まれただけに思えるけど」

「俺も栄転とは思えなかった。すぐにでも帰りたいかつた。でもさすがに持ち場を放棄して帰つてきても、居場所がないつていうのはわかつていたからな」

「居場所ならあるじゃん」

「マック」

顔が見えないまま、俺はヴィデロさんの背中に回した腕の力を強めた。

「門番でいられなくなっても、ここに住めばいいし、なんでも食べていけるよ。ヴィデロさんのだったら普通に冒険者として食べていけるだろうし。俺だってヴィデロさん一人くらい養っていける稼ぎはあるからさ」

「俺がマックに養ってもらうのか？」

「ダメかな。してもらえばっかりつて、俺的に嫌なんだ。それくらいだったら、俺がヴィデロさんを養って、お世話したい」

俺、工房を買っておいでよかった。

だって、ここ、ヴィデロさんの逃げ場になるもん。

きっぱりとそう言い切った瞬間、ヴィデロさんが声を出して笑った。

「マックは、やっぱり男前だ。俺なんか足元にも及ばない」

「えー、ヴィデロさんの方がすごいかっこよくていい男だよ。全俺の憧れなんだから。優しく、たまに可愛くて、すごく強くて、でも料理が出来ないとかくすぐりに弱いかさそういうちよつとしたところがたまらなくて、特に好きなのはその声と胸筋とそして——」

さらにヴィデロさんのいいところを挙げようとしたら、ギョツと腕に力を込められて、口を胸筋で塞がれてしまった。

「もうやめてくれ、さすがに照れる」

「んんむむ……うむむ」

ほんとのことだよ、と言おうとしても、口が塞がれていて言葉にならない。それがくすぐったかったのか、ヴィデロさんが少しだけ身を振ったのがまた可愛かった。ああ。幸せだ。

そろそろ宿舎に顔を出して帰ってきたことを報告しないと、と夜中にヴィデロさんは帰っていった。

セイの街では見ることが出来なかったヴィデロさんの生き生きとした背中を見送る。

戻ってきてくれてほんとによかったな。

それから、工房に入って鍵を閉めたところで、ログアウトを促すアラームが鳴った。

……そうだった。明日も学校だった。そしてもうすぐ試験だ。

明日はログイン出来るのかなあ。でもこっちに帰ってきていつも通りのシフトに戻るなら、明日はヴィデロさんは門番の仕事だろうから。

一瞬だけトレの門に立つヴィデロさんの姿を確認して終わりにしよう。

そう心に誓って、俺はログアウトした。



「金曜日からテストだぞー。しっかり勉強しろよー」

教師からの間延びした励ましを聞きながら、俺はさっさと帰る用意をした。

雄太もいつもは空のカバンに、少しでも教科書を詰めている。

「あれ、雄太勉強するの？ 教科書なんて珍しい」

「ん？ ああ、今回のテストでいい成績取れば、小遣いアップしてもらえるから。そしたらA D O 課金出来るし」

「ああ、ユイにプレゼントか。頑張れ」

「おい、健吾」

課金か、と雄太の言葉に唸る。

A D O には課金枠がある。課金することで、ゲーム内の通貨であるガルが増えたり、最初に設定したアバターを弄ることが出来るようになったりするのだ。

課金したからと言って、特別強い特殊武器とかそういう物が買えるわけではないのは学生に優しいと思う。課金でしか買えないアイテムとかあったら、俺達みたいな貧乏学生は涙を吞んで諦めるか、なげなしの小遣いを叩くしかないわけだから。

雄太は単純にガルを増やすための課金だろう。先に進んだみたいだし、辺境街の装備とか、段違いにいい物売ってそうだから。その分、値段も段違いに高いに違いない。

俺はほぼ課金したことはない。小遣いも雀の涙だし、バイトするくらいなら節制してA D O をしたかったから。

たぶん雄太も同じ考えだから、テストの結果次第で金が増えるのなら、つてちよつとは勉強する

んだらうな。

「健吾は実力で受けるんじゃないのかよ」

「付け焼刃の実力ですがなにか」

雄太が俺の膨らんだカバンを見下ろしていたので、そう返しておいた。

「それよりも、来週の水曜日に抽選結果が出るんだっけ」

「あ、そうだった」

前に予約登録したゲームフェスタの抽選も、テストの終わりとともに結果が出る。

A D O の出るゲームの祭典だ。倍率はすごいけれど、どうにかアーリーチケットを掴み取りたい。

「つても、受かる気がしないから半分諦めてるけどね」

「そうか。唯も増田もプレイもちゃんと予約登録出来たらしいから、誰かが引つかかればいいな」

「つて、増田、アレどうやって予約登録出来たの？ 他の組でも講義中の抽選参加は『ダメ、絶対』状態だったっぽいのに」

「午前中に歯医者予約してたからって、学校の許可を得て遅れて登校してきたらしい。あれは絶対学校で禁止されるのを計算済みで、その日に予約してたんだろ」

「うわあ、増田って結構計算高い？」

「結構えげつない」

プレイブからプレゼントを買って目をウルウルさせているあの増田が計算高いとか。何それ怖い。

そんなことを話していた瞬間、教室のドアから「あれ、二人も今帰りなんだ」という増田の声が聞こえてきて、俺達はそろってビクツとしてしまった。

そんな俺達の様子を見て、増田が半眼になる。

「俺のこと話してたんだ。悪いこと？ そのビビり方的に悪い噂？」

「ち、違う。ゲームフェスの予約登録の話をちょっと」

「あああれ。保健室で聞いたけど、郷野、その時足捻挫したんでしょ。予約したいがために身体を張つてとか、やるなって思ってたんだ」

「わざとじゃないから！」

人聞きが悪い！ 教室でナニを言い出すんだらうねこの人は。

人が少ないのが救いだよ、ほんと。

途中まで一緒に帰ろうか、ということになり、俺達はそろって昇降口に向かった。

増田は俺達の膨らんだカバンをちらつと見て笑う。

「高橋、今日は唯ちゃんと勉強するの？」

「いや、しねえよ。増田はあれか、ブレイブと勉強会か。違う勉強に発展して全然はかどらなそうだよな」

「大丈夫だよ。ノルマご褒美制だから」

「なんだ、なだれ込んで勉強してねえってなったら面白えのに」

さらつと返ってくる増田君は、俺の目にはとても大人に見えました……

なんだよノルマご褒美制って。

毎回増田はそんな大人なことやってるのか。

そんな増田にさらつと返す雄太も、思った以上に大人だった。

途中で、駅に向かう増田と別れて、雄太とA D Oの話をしながら歩く。家の前で雄太と別れて、飲み物を片手に部屋に向かった。

椅子に座って、カバンから教科書を出しながら、ふと増田の大人な言葉を思い出していた。

「ノルマご褒美制か……」

俺も、勉強どれくらいしたらログインしてビデオさんの顔を見てくる、っていうご褒美制にしようかな。

そしたら勉強頑張れる、かも。

テストが終わったら、ご褒美エッチ、とか……

でも、そろそろ『細胞活性剤』の副作用が出そうで怖いよなあ。すつごく気分が盛り上がった時にまた小さくなっちゃったら、多分俺立ち直れなそう。

「じゃあ、こつちを五ページとレポート十ページやったら、ご褒美にビデオさんの顔を見に行こう」

顔を見るだけでいい。会っちゃうと多分話し込んで、仕事終わってから工房にお持ち帰りしちゃうから。ビデオさんも疲れているのにきつと付き合ってくれるから。だから、顔を見るだけ。

よし、と俺は教科書とノートを開いた。

「終わった……」
数時間かけて、ノルマをクリアした俺は、椅子の上で伸びをした。小学生から使っている椅子が、ギシ、と鳴る。

さて、ご褒美貰いに行こうかな。

俺はベッドに向かって、充電器の上に置いてあるギアに手を伸ばした。



ふつと浮かび上がるような感覚の後、工房で身を起こす。

こっちの身体でも伸びをして、俺は暗くなっている街に繰り出していった。

門付近に着くと、立っている門番さんを確認する。

「あれ、ヴィデロさんがいない」

思わず走り寄って、立っている門番さんに声を掛けた。

「こんばんは。あの」

「おお！ マック！ おい、鐘鳴らせ！」

「わかった。マック、ちよっと待ってる」

一言声を掛けただけで、門番さんはヴィデロさん呼び出すための呼び鈴を鳴らした。

何この連携。口を挟む隙もなかったよ。

チラ見してすぐに帰る予定だったんだけどな……

わあ、と口を開けて上を見ていると、門番さんがそつと俺の肩を小突いた。

「どっかでヴィデロが帰ってきたこと聞いたのか？ 今呼んだからすぐ来るぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

頭を下げると、門番さんが嬉しそうに笑う。それからもう一人の門番さんが首を傾げた。

「それにしても、マック最近こっちの門通ってないよな」

「北門のやつに、マックは北に行ってるって聞いたぞ」

「ええと」

「南門来いよ。ヴィデロも帰ってきたからヴィデロにも会えるぞ」

「そういえば、まだブルーテイルは巣立たねえのか？ マックは何か訊いてるか？」

「あ、いえ」

「南といえぼトレの森なんだけどな。最近トレの森の素材がよく採れるらしくてな」

「それはあれだろ、ここで採取してた異邦人がこぞってクワットロに行っちゃったからだろ」

「だから今は森がお得だぞ」

「そうなんですか」

矢継ぎ早に色んな話題が出てきて、俺さつきから相槌しか打ってないよ。

話を必死で聞いていると、後ろからいきなり抱きこまれた。

同時に、耳元でヴィデロさんに「マック」と呼ばれる。

この腕の感触は間違いない。

嬉しくなって振り返ると、そこに蕩けそうな顔をしたヴィデロさんがいた。

「会いに来てくれて嬉しい……」

って、門番さん達ニヤニヤして見ているけど。

ちよつとだけその顔に照れながらも、俺も緩んだ顔を引き締めることが出来なかった。

「今日、休みだったんだ」

「ああ。向こうではほとんど休みがなかったからって、取り計らってくれて、今日は休み。でもマックが忙しいのはわかってたから、一日部屋で休んでたよ」

「よかった。疲れは取れた？ 昨日、香石渡しそびれちゃったから持ってきたんだ。あれは本来、

リラックス用らしいし」

そこまで言うと、「とりあえず、俺の部屋において」とヴィデロさんが言って俺の手を引いた。

抱き着かれたまま、引きずられるように詰所の中に連れていかれる。

あれ、顔見たら帰る予定が……とちらりと頭を過よつたけれど、絶対にそんなことは言い出せない。帰る気もすっかり失せている。

ヴィデロさんに手を引かれて廊下を進み、懐かしいドアをくぐって、ヴィデロさんの部屋にお邪魔する。

ここまで来て、もう帰る、なんて言えない。

来いよ、なんてベッドをポンポンされて、帰れるわけない。誘惑が極上すぎる。

『細胞活性化剤』は持つてこなかったけど。

ちよつと飲み物を貰ってくる、と言うヴィデロさんを見送って、俺はヴィデロさんの本棚を眺めていた。

英雄譚とか基礎剣技とか、ヴィデロさんらしい本がいっぱいだった。

薬草学とかの本もあって、門番さん達もこういうの読んだってちよつと感心する。

なんていうか、この世界の娯楽小説は、魔王と勇者達の英雄譚みたいな話しかないみたいだ。小説ってより伝記なのか。図書館でも、娯楽のための本っていうのは見たことないし。本が娯楽で持てるほどには安価じゃないから仕方ないのかも。

でも、前にトレの図書館ですらつと並んでいるのを見たことがあったから、代々の魔王と英雄譚はかなりの冊数が出ているというのは知っていた。それ以外のモノを探しに行くのが目的だったから一度も読んだことはなかったんだけど、これってもしかして、エミリさん達のが載っている本じゃないかな？

そう思って、そつとその英雄譚を手にとってみる。

表紙を見るに、十五年前の話のようだ。ヴィデロさんも生まれている時代なのに魔王と勇者って、なんか不思議だな。こうして本になっているのを見ると、かなり昔のことのような気がするのにな。

そんなことを思いながら初めのページをめくると、大きな黒い塊と赤い髪の人が対峙する絵が載っていた。挿絵はこの一枚だけみたいだ。

エミリさんが絵として載ってないのが残念だ。

中を読もうかとページを繰ると同時に、部屋のドアが開いた。

「本を見てたのか？」

「おかえりヴィデロさん。うん。実は俺、英雄譚って読んだことなくて」

「気になるなら貸そうか？」

「んー、どうしようかな」

湯気の立つたお茶の入ったカップを手渡されてお礼を言う。ヴィデロさんも自分の分を手に取りつて、座ろうか、と促してきた。

片手の本を本棚に戻し、素直についていく。

「そういえば、前にここに招待して本を見せるっていう約束、まだ果たしてなかったな」

「そうだね。ヴィデロさんがどんな本を読むのか、気になってんだ」

「ありきたりな本しか読んでないからな……。マックの探してるような本がなくてごめん」

「そうじゃないんだ。俺がヴィデロさんの好きなものを知りたくてさ」

だってヴィデロさんの趣味とか、好きな物とか、実は俺、あんまり知らないし。

——もっと知りたいんだ。

そう言うのと、ヴィデロさんが破顔した。

その顔を見て、さらに嬉しくなった俺は本棚を眺める。

「……こういう『剣技の基礎』とか読んだら、俺も剣の腕が上がるのかな」

剣技の指南書を一冊手に取って、中身をペラペラと見てみる。改めて見ると、ヴィデロさんの本棚にはかなりの数の剣技の指南書が詰め込まれていた。

書店で売られている綺麗な本じゃなくて、手作り感満載だ。

「読んだけじゃ無理だな。マックは剣の腕を上げたいのか？」

「うん。そのうちエルフの里に行ってみたいから。腕を上げないと多分たどり着けないし」

「エルフの里……？ 幻と言われている？」

「うん。エミリさんの故郷なんだって。そこが、錬金素材の宝庫らしくて」

「錬金術のためか。ただ、剣はなあ……」

ヴィデロさんの顔が心配そうに響められる。

そうだよなあ。俺、今すぐく弱いし。

苦笑すると、ヴィデロさんが上から、指南書のページをめくった。

「ここに書かれていることをやってみれば必ずならかの手ごたえはあると思う。でも、上限は人それぞれだ。……。マックは剣よりも筋肉をつけることから始めた方がいいかも。剣が重く感じなくなるくらいまで」

「んんー……筋肉かあ……」

俺は本を閉じると、隣に立つヴィデロさんの上腕筋に触れた。

いいなあ、筋肉。出来るならつきたい。

でも一度、中学生の時に雄太に「先に筋肉つけちまうと背が伸びなくなるってよく聞くよな」と

何気ない痛恨の一撃を受けてから、ちよつとだけ筋肉をつけるのが怖いんだよ。だってまだまだ成長期。絶対に成長期真っ只中だから！

「何か問題でもあるのか？」

「前にさ、筋肉をつけちゃうと身長が伸びなくなるって話を聞いて」

ヴィデロさんにそう言うと、ヴィデロさんは思わずといたように噴き出した。
ぐいっと肩を引かれて、綺麗に筋肉のついた腕に抱きこまれる。

「そんなこと誰が言ったんだ。それは違う。俺は小さいころから剣を習っていたけど、結構育ってるだろ。あの修練も身長を伸ばす助けになってると俺は思ってる。気合を入れて修練すると、膝とか肘の骨がミシミシいうくらい成長して、痛くて寝れなかつたくらいだからな」

「え、俺、そんな成長痛経験したことない。修練頑張る。せめてあと少し身長欲しいし」

今でさえ、ヴィデロさんとの身長差は十五センチくらいある。それでもアバターは数センチ盛っているのに。筋トレする。めっちゃ筋トレするよ俺。

「ムッキムキになって、ヴィデロさんを見下ろすくらいに」

「それは楽しみだな」

あ、でも大きくなっても、ヴィデロさんは俺を嫌いにならないかな。小さくて可愛いつてよく言われるし。大きくなってむくつけき雄おとこ！ って感じになったら、嫌われないかちよつと心配。

まだ笑っているヴィデロさんにつられるように笑いながら、本棚の本を目で追っていく。

もちろん抱きこまれた腕はそのままだ。上腕二頭筋を堪能中。

下の方にはマナーの本や貴族が持つてそうな本が並んでいた。

こっちは装丁がすごく綺麗。

俺が視線を奪われたのに気付いたのか、「ああ」とヴィデロさんが呟く。

「それは父親の部屋にあった本を適当に貰ってきたんだ。残したのはその数冊くらいであとは売っただけだな」

「お父さんの」

やっぱり、ヴィデロさんのお父さんは貴族だったのかな。平民とか街に住んでいるような人は、マナーや作法なんてあんまり使わないだろうし。

寂しくないかな、とそつとヴィデロさんの腰に腕を回すと、ヴィデロさんは、大丈夫って言うように俺の髪にキスを落とした。

なんとなく視線を落とす。すると、お父さんの形見の本の置かれたさらに奥に、背表紙のない薄い本が一冊挿し込まれていた。

それが気になって、俺は手を伸ばしてみた。

「これは……？」

でも、先にヴィデロさんの手がその本にかかった。

見ちゃヤバイやつかな、と思つて手を引っ込めると、ヴィデロさんがその本をスツと抜き取つた。そして、ぺらつと、何も書かれていない表紙をめくる。

その瞬間、俺は息を呑んだ。

「え……この字……」

そこには、俺達プレイヤーにとってはなじみの文字、英語が書かれていた。基本このゲームでは、この世界で使われる言語と文字を使用している。

プレイヤーは翻訳機能で、この世界での話を通じるし文字も読める、ということになっている。だから、看板とかそういうのは、実際には使ったこともない文字なんだ。

街の名前には、イタリア語の一から十までの名前が使われているけど、こっちの言語では全然違う文字や発音なのを翻訳でそう読んでいるだけなのかもしれない——ということだ。

そこからへんはどうなっているのかいまいわからないんだけど。だから、英語表記なんなのを、ログイン中に見るのは初めてだ。

思わずガン見してしまった。

ヴィデロさんはそつとその文字を指先でなぞる。

「不思議な文字だろ。母親の故郷の文字なんだそうだ。俺の血の半分は、その文字を使っている国の血だからと、母親が小さいころから教えてくれてな。意味はよく分からないが、音は取れる」

そう言うと、ヴィデロさんは俺を抱き込んだまま、耳元で流暢な英語をその口から紡いだ。

どきつと心臓が一つ跳ねた。

なぜか、その英語に翻訳機能は効かなくて、ただ英語だけが耳に入ってくる。

その言葉、俺の世界の言語だよ。

半分はその血が入っているって……やっぱり、モントさんが言っていたこと、本当だったのかな。どういうことなんだろう。そういう設定？ にしては、手が込みすぎていて、質が悪すぎる。

だからこそ、単なる設定なんかじゃないんじゃないかって思っちゃうじゃないか。

「お、母さんの、故郷の文字なんだ……こつちでは、使われていない文字なの……？」

震えそうになる声でヴィデロさんに聞くと、ヴィデロさんは静かに首を縦に振った。

「ああ。この国の言語は俺達が今使っているものだけ。こんな文字は母しか使わなかったし、言語学の教授も見ることがないと言っていた」

そうだね。こつちの文字はアルファベットではなくて、装飾とか記号に近い文字だから。

古代魔道語だつて知らなければ、記号の羅列にしか見えないし。

……じゃあ、これはいったい、なんなんだろう。

本は確かな質感でここに存在している。けれど中の文字は、この世界には存在しないはずだ。そつと文字を指でたどると、ちゃんとペンで書かれたとわかる紙のへこみが存在している。

「俺は、母が仕事の合間にこの文字を書いているのを見たことがあるし、この国の文字を書くよりもよほど流暢に書いていた。だから、本当に母の国の文字なんだと思う」

「し、信用していないわけじゃないんだけど、英語がここに書かれているのが、すごく不思議で……」

「エイゴ……？」

ヴィデロさんが目を見開く。

「この文字は、エイゴというのか……本当に、マックの、所の、文字なのか……？」

「俺の使う言語は、日本語っていうんだけど……うん、俺達が学校で習う言語、だよ」

俺がそう答えると、ヴィデロさんがほんの少しだけ、顔を歪ませた。その顔が少しだけ、泣きそうに見える――

たまらずに俺はヴィデロさんの指に自分の指を絡めて、手をつないだ。

ヴィデロさんの体温が、伝わってくる。

その体温が、この世界が本物の世界なのではと錯覚させる。

どっちも本物の世界で、実はここが仮想空間なんかじゃなくて、本当にヴィデロさんのお母さんがあつちの世界からこつちに迷い込んできていたりしたら。

もしかしたらヴィデロさんだって……

つないだ手を持ち上げて、そこにキスをする。

その質感も、爪も、剣を持つ戦うためのごつい手も、すべてが本物なんだと訴えてくる。

これがゲームとしてのギミックの一つだったとしたら？

クエストを拾うための駒の一つかもしれない。

けれど、もし、これがゲームのシステムなんかに関係なく、現実世界からここに来たヴィデロさんのお母さんによるものだとしたら？

心の中で相反する気持ちがぎゅうぎゅうと胸を締め付ける。

これは現実世界とこの世界が本当に繋がっている証拠だと、縋りつきたくなる。

でも、たとえそうだとしても、ヴィデロさんの住んでいるところはこのADOの世界だ。

俺がこれから先も生きていくであろう場所は向こう――現実の世界。俺はギアを使ってこのアバターで身体を動かしているから、ヴィデロさんにとっては俺の方が偽物。

俺は沈みそうになるそんな気分を振り払うように、その本の最初のページの文を口にした。

ヴィデロさんよりもよほどたどたどしい英語の発音で。

「私^{My}は^{his}この^{is}子^{who}が^{is}幸^{is}せ^{is}である^{is}ことを^{is}言^{is}って^{is}、書^{is}いて^{is}ある^{is}ね」

「そうか、本当に……っ」

お母さんの気持ちだが、その一言に詰め込まれている気がした。

ヴィデロさんは俺の言葉を聞くと、俺をぎゅっと抱きしめて肩に顔をうずめた。

今ヴィデロさんがどんな気持ちなのか、わからないけれど。

俺も気持ちが悪くぐちゃぐちゃで、何を言っているかわからないけれど。

もしヴィデロさんのお母さんがまだちゃんと生きていて、俺達の世界に帰ってきていたと仮定したら、多分、今もヴィデロさんをちゃんと想っていていてくれる。

この一文だけで、そう予想出来た。

それから、ヴィデロさんはそつとその本を閉じて本棚に戻した。この世界で英語を使えるのはきつとヴィデロさんのお母さんだけ。だから、たぶん他の中身もお母さんが書いたものだ。

そんなものを見せてなんて言えない。ただ、本が棚に収まるのを俺は目で追っていた。

「見せてくれてありがとう、ヴィデロさん」

腕の中で向きを変えて、ヴィデロさんの腰に抱き付く。見上げれば、ヴィデロさんも少しだけ戸惑ったような顔をしていた。

「いや、でも……」

俺を見下ろしたヴィデロさんは、一度ゆっくり目を瞑ると、フツと微笑んだ。

「これで、マックに隠し事がなくなったなと思うと、ほっとするよな、怖いよな……」
その気持ちはわかる。

俺だって、ログアウトした後の生活なんて、ヴィデロさんに何一つ教えてない。

この世界にそういうのを持ち込むのは嫌だって思っていたけど、でも、もしかしたら教えてもいいのかな。ヴィデロさん、嫌がらないかな。

ちよつとだけ考えてから、俺はつらつらと向こうの世界の俺のことを話し始めた。

「俺、実は成績そんなに良くなってさ、勉強とか苦手なんだ。あと、レアのステーキは食べられない。運動も得意じゃないし。趣味はゲームくらい。あ、でも本を読むのは嫌いじゃない。コンプレックスは……小さいこと。母さんがすごく小さい人で、父さんもそんなに大きな人じゃないから、本当はもう……身長伸びるの半分諦めてるんだ」

なんとなく、ヴィデロさんには知っていてほしいなって思ってたんだ。

ヴィデロさんが、言いたくなかったことを俺に教えてくれたように。

「うちの母さん、百四十七センチしかないんだ。俺よりさらに二十センチ低いんだよ」

ヴィデロさんに身体を寄せたまま自分の顎付近を手で指し示すと、ヴィデロさんはふつと雰囲気

を和らげて顔を綻ばせた。

「それは……小さい人なんだな。子供のようで可愛らしいな」

「ヴィデロさんが訊きたいって言えば、俺、なんでも教えるよ。訊きたくない時は逆に言わないから。だから」

言葉が続けようとしたところで、ヴィデロさんの口が俺の口を塞いだ。

啄むようなキスをされて、つつい目閉じる。

少しの間キスと髪を梳くヴィデロさんの指を堪能していると、ヴィデロさんの口が離れていった。

「俺は、どんなマックでも、愛してる」

「俺も、好き。どんな裏があっても、どんなヴィデロさんでも、絶対ヴィデロさんが好き」

「裏つて……俺は悪いことはしてないぞ」

ヴィデロさんがぐすくす笑うのを見て、俺の心も少しだけ上向いた。胸に広がる波紋は残したままだけ。

それからヴィデロさんに送られて工房まで帰ってきた俺は、工房の椅子に座って溜め息を吐いた。ヴィデロさんのことを色々知る度に、余計にわからなくなる。

ヴィデロさんのお母さん、本当に現実世界で生きているのかな。

それとも、あの本はやっぱりこのゲームを深く遊ぶために仕込まれたギミックなのか、何かクエストを拾うための駒の一つなのか。

——さっきの英語の文字が目には焼き付いて離れない。

誰でもいいから、本当のことを教えてほしい。
ここが作られた虚構^{バーチャル}なのか、異世界^{アバターメンション}という名の現実なのか。

二、ラッキーイベント

終わった。

テストが終わった。

出来が悪くて精神的に終わったとかそういうことではなく、物理的に終わった。

テスト期間中は土日にしログインしただけで、失敗作を量産して終わってしまった。

気晴らしに調薬していたはずが調薬のイライラをテスト勉強で晴らした——というなんとも本末転倒なことになってしまった。

答えが最初からある問題って、なんて良心的なんだ。

初めてテスト勉強を楽しいと思えたのは怪我の功名ってやつだ。

これじゃ、いつになったら宰相さんのクエストが終わるのかわからない。二つも先の見えないクエストを抱え込んでしまっている。

でも、そのおかげか何なのか、かなり答えは埋められた気がする。当社比だけど。

そして、ついに『オータムオンラインゲームフェスタ』の抽選結果が届く日が来た。

当選者には登録したメールアドレス宛の当選メールが届く。それにフェスのサイト上でも当選した抽選番号が確認出来るらしい。

どちらの情報も早く来るか分からないので、俺と雄太と増田は、端末片手に学校で固唾^{かたず}を呑んでサイトと通知を見守っていた。

ちなみに、俺にはいまだ当選メールが来ていない。

「あ、『しばらくお待ちください』が解除された」

雄太の言葉に、三人の頭がギョツと寄る。

一つの端末を覗き込んだ俺達は、ただただ数字の羅列を見ていた。そして——

勝者、増田。

まずは雄太の番号は全く引つかからなかった。

さらにスクロールしていくと、増田の抽選番号『4477』を発見。

同時に増田の端末が震えた。

「あ、当選メール来た」

「何!? 見せろ!」

「マジか! 増田すげえ!」

俺と雄太は増田の端末を、またもぎゆうぎゆうに集まって覗き込んだ。

そこには、夢にまで見た『当選しました』の文字が。

ああ、この当選メール、都市伝説じゃなかったんだ……そう呟いた途端、雄太に激しく同意さ

れた。

ちなみに、俺の番号はまったく見当たらなかったし、メールも受信しなかった。だがよい、増田様のおかげで、俺も勝者だ！

「入金したら優先チケット送られてくるんだって。早速帰りに入金しよう。二人とも、持ち合わせある？」

「こういう時のために、今日は多めに持つてきた」

どや顔で答える雄太に、俺も頷く。

誰かしらが当選していたら、即入金の流れで行こうと思っていたから俺も雄太も財布の中はつかの間の潤いで満ちている。

帰り、途中のコンビニで入金した俺達は、ゲームフェスタのことで盛り上がった。

とにかく会場に入ったらA D Oブースに走ろうってことで落ち着いたけど、俺も一緒に行動するってことになってるっぽい。

ええと、一緒に行くのって二組のカップルだね。俺の居場所あるかな。

……隙を見て、二組から離れよう。そうしよう。

さて、テスト勉強中、ヴィデロさんとは門のところまで話をしただけで終わっていた。

だから、ようやく本格的に会えるんだな、と思いつながらルンルン気分でログインする。

前回会った時、ヴィデロさんにはしばらくはあんまり顔を見られないかもって説明をしたんだ。

思えばすれ違いばかりだったけど、ようやくそれも終わりになったってことかな。

ワクワクしながら工房を出ると、入り口にクラッシュからの張り紙があった。

曰く、すぐに雑貨屋に来いとのことだった。

なんだろう。また緊急のクエストかな。もしかして、またしてもすれ違いの日々が……なんてどきっとしつつ、俺は急いで雑貨屋に向かった。

雑貨屋に着くと、店の入り口にはクローズの文字が躍もっている。

「え、まさかほんとに緊急……!？」

ドアをドンドンと叩くと、中からドアが開けられた。

ドアを開けた人物を見て、俺は思わず目を見開く。

「ヴィデロさん……?」

「おいで、マック」

ヴィデロさんに肩を抱かれて引き寄せられる。

今度はヴィデロさんも巻き込んだ緊急クエスト……?

心臓のドキドキが半端ない状態で店に足を踏み入れると、クラッシュがすぐ近くにいて、笑顔で手招きをしている。

「待ってたよマック」

「ようやく来たわね、マック」

女性の声に視線を向けると、カウンターの前の椅子にエミリさんが座っていた。



「何か、あったんじゃ……」

想像と違う和やかな雰囲気には戸惑いつつ見上げると、ヴィデロさんは見ただけで安心するような笑みを俺に向けてくれた。

「統括のご厚意でな、俺とマックにいい物を見せてくれるそうなんだ」

「いい物……?」

首を捻っていると、エミリさんが立ち上がりこちらへ近付いてくる。

「さ、クラッシュに掴まって」

そう言いながら、エミリさんがクラッシュの左手に自分の手を添える。

俺もヴィデロさんに手を引かれるまま、クラッシュの腕を掴んだ。

転移の魔法陣が光る。

——瞬間、視界が一転した。

目の前には、大きな青い鳥。そしてその胸元からちよこんと顔を出しているのは、モフモフした産毛の生えたブルーテイルの雛。

「か……っわいい……!」

巣に収まって丸くなっている親鳥も可愛いけれど、ふわっふわの毛を身にまとった雛鳥は思わずそう叫んでしまうほどに可愛かった。

思わずその可愛い親子をスクショする。

悶える俺の隣で、クラッシュが胸を張る。

「前にヴィデロと見たいって言ってたよね。だから母さんに聞いてみたんだ。マックに見せてあげられないのかって」

「大勢じゃブルーテイルがびつくりしちゃうけど、でもこの間お世話になったしね」

ニコッと微笑むエミリさんが女神に見えます。とりあえず押んでおこう。

「ありがとうございます！ほんと、可愛い。ね、ヴィデロさん、可愛いよ！この鳥、幸運を呼ぶんだって。この雛が見られただけでも幸運だよ。しかもヴィデロさんと一緒に見られるなんてエミリさん、ほんとにありがとうございます。クラッシュも」

テストは終わるし増田は当選したし、ヴィデロさんと一緒に雛鳥は見れるし……今日がいいこと尽くめ過ぎて、あとが怖いくらいだ。

とりあえずモフモフを目に焼き付けておこう、とヴィデロさんと手を繋いだまま見ていると、雛鳥が小さく一つ高い声でピヨ、と鳴いた。鳴き声も可愛い。

「あの産毛が生え変わったら巣立ちの時期なのよ。もうすぐ撤去作業に入るから、よければマックも手伝ってね。とはいえ、ブルーテイルの羽根はすでに持っているみたいだけど」

ちらり、とエミリさんが俺の胸元のアミュレットに視線をくれた。

うん、勿論参加させてもらいますとも！

俺にはもう何より大事な羽根があるから、撤去作業はただただ参加したいただけけど。とはいえ、魔法も使えない俺がどれだけ手伝えるかわからない。爆弾を何個か投げたら巣も崩れるかな。

そんなことを考えつつ、しばらくは四人でブルーテイルの親子を見ていた。

森は静かで、マップを見ても魔物は見当たらない。

ただちよろちよろと流れる水の音が辺りに響いていた。

癒されるって、このことかな。なんて、凧いだ心で深呼吸をする。

時折、職員らしき人が隅に張られたテントから出てきてブルーテイルを観察しては、手に持った紙に何かを書きつけてまた消えていく。

こうやって管理しているんだ、冒険者ギルド。

すごいなあ、と職員さんを目で追っていると、ふとブルーテイルが立ち上がった。そして、空に向かって羽ばたいていってしまう。

胸元にいたはずの雛はいつの間にか巣の中にくろんと転がっていた。

「え、雛を残して行っちゃうの!？」

途端、マップに映る敵影。

雛一羽になったところを見計らって魔物が来たらしい。

「魔物が！」

駆け出そうとすると、職員さんが出てきて、さっと魔物に向かって手を上げた。

「聡明なる水の精よ、卑しき物を滅殺せよ、アクアショット！」

職員さんの指から、シュバツと凄い勢いの水が発射される。あ、これ、水圧で鉄を切る系の魔法だ。